

## 平林初之輔とその時代(1)・大正7年8年

渡 辺 和 靖  
Kazuyasu WATANABE

(哲学教室)

### I 感受性の变革——方法論的考察

これから何回かにわたって、平林初之輔をとりあげ、その出発から死に至るまで、時間を追って考察していきたい。今回はその第一回として、平林の最初期の思想をとり上げるが、それにききだって、大正昭和思想史<sup>(1)</sup>の対象として、平林という文芸評論家を扱うことの意味について、ここであらかじめ概括的に述べておきたいと思う。

思想史の対象として文学をとり上げることは、思想史が単なる哲学史や学説史にとどまらず、社会全体のトータルな把握をこころざすならば、当然なされなければならない作業の一つだといえる。

しかし、文学を大正昭和思想史の対象としてとり上げるのは、単にそれが思想史の一領域であるという一般的な理由からではない。明治期にあっては、たしかに、哲学は深く時代と斬りむすんでいた。大正期に入ると、哲学は、しだいに専門化し、アカデミズムという狭い世界のうちにとじ込めるようになる<sup>(2)</sup>。このような時代においては、文学の世界が思想史の対象としてクローズアップされる特別の理由がある。

橋川文三氏は、「文学史と思想史——思想の方法ということを中心に」(『思想』昭和33年7月)という論文において、次のように論じている。

我国の現代史において、実質的な思想論争がさかんに行われたという点では「文学」が「思想」に立ちまさっていたといえれば独断になるであろうか？ 私はそれは独断ではなく、歴史的意味でも正しいと考える。常識の言葉でいえば、我国の現代史の中では、「思想」の追求において、文学者はたしかに前衛の役割を果しており、その悲劇も光栄もすべてその点に帰すると考えられる。(58頁)

さらにつづけて橋川氏は、昭和4年に平林初之輔によって提起された「芸術的価値論争」を具体的にとり上げ、次のように論じている。芸術的価値論争は、マルクス主義の「本質→実体→現象という思索方式の体系」に対する「現象」の反逆であった。それは、「芸術の独自性の要求」として現象したが、本来的には「イデオロギー諸形態の個性的実質を認めようという主張をとおして、その人格的表現である個体の独自の機能(=思想性)の確認要求に転化すべきものであった。」(62~3頁)

問題は日本の近代社会という曖昧な社会的状況の中で、その状況性そのものの中に解消することのない、しかも、それに対して正確な変数的機能の独自性を保つような主体を創り出すことにかかっていた。いいかえれば、自然や状況や主義や道徳や風俗の

中に同一化されることのない、「思想」の機能を見出すことにかかっていた。(65頁)

橋川氏の主張は、そのような「主体」の形成において、文学史と思想史は平行していたばかりでなく、とりわけ文学が有利な立場にあった、というところにある。

西田幾多郎や田辺元や三木清といった哲学者たちが、時代とまったく関わることなく思索を展開した、というのではもちろんない。しかし、哲学は論理であり体系であり、そうした哲学の構造が、彼らが時代の動きを生き生きと伝えることをはばんだ、ということは充分考えられる。

たとえば、マルクス主義が日本の思想界に与えた衝撃は、哲学の領域においては、「構想力の論理」の形成へと向かった三木にしても、絶対弁証法を対置した田辺にしても、論理のレベルにとどまっている。これに対して、文学の世界では、それを肯定する側も否定する側も、自殺した芥川や有島を含めて、感受性のレベルで、深刻なショックとして受けとめられている。

明治末から大正にかけての時期は、それをどのような概念で捉えるかは別として、日本社会全体の大きな転換期であった。いま、中村勝氏の叙述をかりてそれを示せば、以下のようになる。

六大都市人口は、1886年(明治19)に200万人に達したあと、17年後の1903年(明治36)には400万人に倍増し、さらに15年後の18年(大正7年)には600万人台に、そして25年(大正14)には、東京、横浜が関東大震災の影響を受けて人口の急減をみたにもかかわらず、660万人に達した。職業別人口割合の推移をみると、1887年(明治20)には農業74.5%に対して工業8.9%、商業6.8%、交通業0.8%であったのが、1927年(昭和2)には農業45.1%、工業22.1%、商業13.0%、交通業5.0%となり、農村人口の商工業人口への転化傾向があきらかであった。(『市場の語る日本の近代』140～1頁、そして、昭和55年)

こうした社会の変換は、これまで、資本主義形成期の問題として、とりわけ反体制層の形成として、とり上げられることが多かった<sup>(3)</sup>。しかし、そうした変換は、体制・反体制といった枠組みを越えて、思想や文化の全体にわたって根本的な変化を強いたのであり、日本人の感受性の変革としてとり上げられなければならないように思われる<sup>(4)</sup>。

大正昭和思想史のモチーフを感受性の変革として捉えるならば、そこで文学が重要な役割を演ずることになることは、おのずから明白であろう。文学こそは、論理や体系ではなく、みずからの感受性をたよりとして社会と相渉ろうとする営為に他ならない。

平林は、死の年、昭和6年2月『新潮』誌上に発表した「日本文学は何処へ行く」と題する評論において、次のように論じている。

日本の現代文学を「社会階級の見地」から分析すれば、「小ブルジョアの文学」と規定することができる。(「一、現代文学の小ブルジョア性」)

日本の小ブルジョア文学は、自然主義文学にはじまる。自然主義以前の、紅葉、風葉、天外、幽芳といった作家たちは、「自らは清貧に甘んじつつ富豪を描き、陸軍大將を描き伯爵夫人を描いた。」「現実の生活」と「紙上の生活」とのこの分裂が、彼らの文学から「批判的性質」を奪った。

日露戦争の前後から、小ブルジョアは自覚し、「偶像化されたブルジョアは消滅した。」しかし、彼らはブルジョアを「嫌悪」したが「積極的な反抗」をくわだてなかった。フラ

ンスのそれとくらべて「日本の自然主義文学が著しく消極的であつたのは、当時の日本の小ブルジョアの社会的意識の幼稚さを示してゐる。」

白樺派などの「人道主義文学」は「小ブルジョアのイデオロギーの少し進んだ段階に照応する。」そこには「ブルジョアジーに対する力のない反抗」がある。しかし、彼らは「ただ観念的に、平和と正義とを求め」「現実から遊離した。」

第1次世界大戦を画期として、ブルジョアとプロレタリアの階級対立は尖鋭化し、「小ブルジョアの陣営には分裂がはじまつた。」こうして、人道主義文学は「プロレタリア文学」にかわつた。これに対して、旧来の文学者たちは「芸術のために芸術を固守し」、この一派に対して「ブルジョア文学といふレッテル」がはられた。

だがブルジョア文学もプロレタリア文学も、ひとしく小ブルジョアの文学であり、それぞれ小ブルジョアの心的状態の表現に外ならなかつた。プロレタリア文学には、焦燥と、過激と、虚無との小ブルジョア性の刻印がついてゐたし、ブルジョア文学にも、不安と自暴自棄と逃避との小ブルジョア的刻印がついてゐた。

大正末から現在に至るまで、プロレタリア文学はマルクス主義の強い影響下にあるが、「その準拠しかたが観念的であり誇張的であり、末梢的であり、しかも時としては多分に頹廢的ですからあるところに明瞭な小ブルジョア性がある。」

つづいて、平林は、現代を特徴づけている「社会不安」に眼を向ける。(「二、現代の社会不安と文学」)

この社会不安は、人々に「消極的にか積極的に、現状の打破、現状からの逸脱を要求する。」その態度のいかんによって、プロレタリア文学と新芸術派文学とが分かれる。しかし、反逆するにせよ自己の内部に向かうにせよ、いずれも小ブルジョアの文学であり、「小ブルジョアの右翼から左翼へ、龍膽寺雄から大宅壮一へ、榑崎勤から林房雄へ、吉行エイスケから片岡鐵兵へ、一様にモダーニズムが風靡してゆく。」

「現代の社会を特色づけてゐる最も重要な力は何か？ それは機械だ。」と平林は、つづける。(「三、機械の発達と現代の文学」)

機械の特色は「運動と速度！」そこから「新しいリズム」が生まれる。機械は「古典美術」をくつがえし「未来派」を生み出す。その破壊的な影響力は、プロレタリア文学も芸術派文学もひとしく捉えている。

機械は生産の様式を一変し、生産様式の変化は資本を集中して、大都会ができあがる。大都会は現代が産んだ現代の奇蹟だ。そこでは社会の新陳代謝が、最も急速に行はれる。こゝで、機械礼讃は、ただちに都会主義と接続してゐる。アスファルトの道路と鉄筋コンクリートの建築、地下鉄とタクシー、喫茶店と酒場、百貨店とアパート、大都会を構成するこれ等の要素には、新しい美がある。

都会主義も、また、プロレタリア文学と芸術派文学とを「一色」にそめる。都会は「自然に対する人間の勝利」を象徴する。「その消費生活を主として夜間、人工の光の下で営んでゐる都会人」には自然はすでに消滅している。

資本主義の発達は、すべてのものを「商品化」し、文学作品もまた商品化されざるをえない、と平林は指摘する。(「四、商業主義と現代の文学」)

商業はジャーナリズムによって文学を大衆化した。その産物が「大衆文学」である。それは「意識的に商業主義と妥協した文学」である。そこでは「お客様の注文によりてつく

るといふ商業の原則が支配してゐる。」

芸術派文学もプロレタリア文学も、商業主義の支配をまぬがれることはできない。「近頃の検閲の乱暴さは言語に絶する」が、それよりさらに「恐るべき検閲」は「意識されないジャーナリズムの検閲」である。

以上の分析は、「現代文学の悪いところはすべてブルジョア制度のせむにするやうな簡単明瞭さ」を欠いているかもしれない。しかし、「事実におほひかぶせられた結論」ではなく、「事実の中から抽出された結論」こそが求められているのだ、と平林は断言する。(「五、現代文学は何処へ行く」)

「現在文学の上に加へられてゐる色々な力は、みな、文学を解体させるやうな力ばかりである」。芸術派文学は「イデオロギー的に既に解体してゐる。」プロレタリア文学も「公式文学、狂言文学に固定しようとしてゐる。」

現代の文学はまづその真面目をとりかへさねばならない。その、肺腑に迫る深刻さを回復しなければならぬ。消費生活の尖端を追ふことをやめて、現代生活の大動脈に近迫してゆかなければならぬ。遊離的、浮動的な小ブルジョアの昂奮から脱して、現実と相搏つ情熱をとりかへさねばならぬ。あらゆる公式主義をすて、作品内容に対する凡ゆる規定を排して、素直さと、自然さとを回復しなければならぬ。

このようにして「内容に於けるシンセリテイ」を回復すると同時に「新美学に準拠した一定の形式」を獲得しなければならぬ。そのようにして復活した文学は「新古典主義」と名づけられよう。そして、おそらく、それはプロレタリアの手によって実現されるであろう<sup>(6)</sup>。

ここには、プロレタリア文学運動をめぐりぬけてきた平林自身の体験と、そこから離脱して後沈潜した日本近代の分析とが、みごとに結合している。平林が、日本の近代文学を「小ブルジョアの文学」として対象化したのは、マルクス主義の功績であろう。しかし、プロレタリア文学をもむしばむ「機械」の力や「都会主義」を洞察したのは、思想の正統性と運動のヘゲモニーをめぐる展開するマルクス主義の功績ではなかった<sup>(6)</sup>。

平林の分析がすぐれているのは、新興芸術派とかプロレタリア文学といった表面的なレッテルにとらわれることなく、その両者をともにむしばみつつある、機械文明のもたらす「新しいリズム」「都会主義」「商業主義」という、日本社会の転換にともなう日本人の感受性の変革を鋭く見すえているからである。平林の提唱する新古典主義とは、そうした感受性の変革をふまえて、新しい表現の形式を求めようとする試みに他ならなかった。

このようなすぐれた認識が可能であったのは、既にふれた平林の経歴、プロレタリア文学運動の体験とそれからの離脱、他に、大正末から昭和初にかけてのこの時期が、日本近代の自己反省の時に当たっていたということが考えられる。

大正思想の基調をなした新カント派の哲学は、対象の認識をモチーフとしていたが、それが必ずしも自己のおかれた現実へと向かわなかつたところに、また、大正思想の特徴があったのである。よかれあしかれ、主体を規定する諸々の拘束から自由になり、普遍妥当性へと飛翔するところに、大正思想の特徴があった<sup>(7)</sup>。

しかし、やがてそれは、自己の立つ基盤としての日本近代への反省へといきつかざるをえなかつた。教養主義の旗手であった和辻哲郎や阿部次郎による日本の古代文化や近世文化の研究は、そうした自己認識への第一歩であった。津田左右吉による日本神話の研究、

村岡典嗣による日本思想史学の創始なども同じ流れを形成していたといえる。また、大正デモクラシーのイデオログ吉野作造が明治文化の研究へと向かうのも、同じ意図によって貫かれている。

平林の思想を考察することは、近代文学の社会思想史的な把握の問題として、日本近代の自己認識の問題として、また、日本におけるマルクス主義思想の問題として、深く大正昭和思想史の枠組みのうちに結合されている。そして、それらの問題は、おそらく、日本社会の全面的な転換にともなう日本人の感受性の変革という根本的な課題へと収斂していくにちがいない。

## Ⅱ 過渡期としての現代——最初期の哲学論文

平林の文芸評論家としての出発は、『新潮』大正9年3月号に「ロマンチック時代」を発表した時とすることができよう。彼の評論が多く注目されたのも、文学に対する姿勢が明確に打ち出されたのも、これ以後のことである。

ところで、平林は、これ以前にも既に何篇かの論文を発表している。これらの論稿は、混沌としてまだ明確な立場を示すに至っていないが、それだからこそかえって、それ以後の彼の、とりわけ振幅の大きい活動を理解するための手掛りを、原形質のうちに提示しているともいえよう。

それらの最初期に属する作品群は、大別すると次の二つに分けることができる。

①大正7年(1918)9月から翌年3月までに『新時代』に発表された論文

②大正8年7月から12月までに『やまと新聞』に発表された文芸時評

この時期の平林を論じたものとしては、紅野敏郎氏「平林初之輔——初期文芸時評をめぐって」(『文学』昭和41年7月)、渡辺正彦氏「平林初之輔試論——そのⅠ 出発点の検討」(『日本近代文学』15集、昭和46年10月)を挙げることができる。しかし、両者とも、主として②を対象としているにすぎず、①については、後者がわずかにその一端にふれているだけである。

平林を単なる文芸評論家という枠組みのうちに閉じこめようとするのならともかく、日本近代の全体を視野に入れた思想家として捉えようとするなら、①を分析することなくその「出発」を論ずることはできない。

### 「文明批評家としての北吟吉」(『新時代』大正7年9月)

北吟吉は、大正3年から7年まで早稲田大学哲学科の講師をしていた。大正2年から6年まで同大学英文科に在学していた平林は、なんらかの形で北に接触したか興味をもっていただけと思われる。この論文が発表されたころは、北はアメリカに渡りハーバート大学に留学していた。北が、英国、フランス、イタリア、スイスなどを回り帰朝するのは、大正11年のことになる。

平林のここでの関心は、北吟吉の思想を分析しその構造を明示することよりも、北の思想のうちに示されている現代の思想的状況を剔抉することに注がれている。平林の関心は、徹頭徹尾、現代にある。

平林は、フランス人はフランス文化を、ドイツ人はドイツ文化を誇ることができ、それには「相当の根拠」があるのに、日本人は世界に対して誇るべきなものも持たないと、

劈頭断言する。ここで北吟吉を論ずるのは、「奴隷の状態にある日本文化」の「独立」を願うからである。(79頁)

つづいて平林は、「現代」について次のように概括する。

現代は実に自然科学全盛時代である。政治も産業も学術も宗教も、芸術も戦争も一として自然科学の影響に超然たるものはなく、其の結果一般人の思想並に生活は著しく科学の規制を蒙り機械的的数量的色彩が鮮かである。(79頁)

平林は、現代の主流を「自然科学全盛時代」と規定し「機械的的数量的色彩」があらゆる方面に浸透していることを指摘する。しかし、彼の現代に対する観察はここにとどまらない。そうした主流流のうちに、既に「反作用」としての「反抗」が胎動しつつあることを、平林は鋭く見ぬいている。

現代に於ては科学的思想と相並んで科学に対する反動思想も亦隠然一大勢力を占めてゐる。少くも進歩せる思想家の間に於ては機械的、数量的思想は必ずしも現代の特色とは称し難く、反対に機械的に対する精神的、数量的に対する実質的の反動思想が一層顕著であるとさへ言ひ得る。

このように平林は、ポアンカレなどの例をとって、科学的な主流流のうちに、とりわけその先端の部分で、科学に対する理想主義的反動がはじまっていることを指摘する。(79～80頁)

こうした平林の現代に対する認識は、当時の最も進んだ、西田幾多郎や田辺元の認識と一致している<sup>(8)</sup>。

嘗て啓蒙主義の表面的自覚はカントによつて真に内面的我的自覚に達し、十九世紀初期のロマンチズムに到つて深く大なる我的自覚に達した。併し古きロマンチズムは未だ十分客観其者の根柢に達し、客観其者をして語らしめた主観主義ではなかつた、尚客観を無視した抽象的主観主義であつた。これその自然科学の勃興と共に久しからずして滅びざるを得なかつた所以である。現代のロマンチズムは自然科学の煉獄を経たロマンチズムである。自然主義や実証主義の徹底から出た理想主義である。

(西田幾多郎「現代の哲学」『哲学研究』大正5年3月。『西田幾多郎全集』第1巻、368頁、岩波書店)

このように平林が、現代を、単なる自然科学全盛の時代としてではなく、既に理想主義への反動を内包する時代と見たことは、北吟吉の評価に大きく関わっている。平林は、北が「第一義生活」を主張して現代の「利己的、享乐的」風潮を厳しく批判するのを、現代に対する「反抗」としてではなく、「現代の時代精神を以て自己の精神とする現代人」として位置づける。(80頁)

つまり、平林にとって、科学を単に否定することは、なんの解決でもない。問題は、いかにして科学に対する人間の優位を確立するかである。北は「修養と頓悟」という二つの方法を示しているが、このような「空疎なる方法の暗示」は、「第一義生活」を実現する保障とはならない。「こゝに氏の論議に被ふべからざる不備が存する。」(80頁)

おそらく北の欠陥は、現代を、「利己主義、享樂主義、功利主義、文化主義等」といった「固定せるイズム」によって捉えているところにある。

実に現代否一切の時代は流動変転して已まざる過渡期である。而して一切の時代は悉く平々凡々にして心ある人には常に不満を誘発する。蓋し不満あるが故に向上がある

のである。現代の不満が過去の思慕となり未来の憧憬となるは人類の精神生活の上に造化の加へたる美妙なる遠近法であつて、之あるが為に人類の生活は進歩向上を已めぬのである。(80~1頁)

すべての時代は過渡期である、これが平林の認識である。不満こそが進歩の要件である、これが平林の認識である。自然科学全盛への反抗として、自然科学のうちに既に理想主義的反動が胎動しつつあるのを見ていた平林にとって、科学思想を「利己的、享樂的」と固定し、それに「第一義生活」を対置する北の発想は、なんともはがゆいものであったにちがいない。

北の主張が「無の讚美」を結論としているのは「意外」でもなんでもない。「絶対自由の世界に於て科学何するものぞ、道德何するものぞ」氏の哲学においては「科学は神秘と撞着せず、自由は権威と矛盾せず、有限は無限と背反せず」「一大調和の芸術」となる。(83頁)

この論文は、決してあからさまに北を批判するようにはなっていない。「其の思想全体の傾向」から見れば、おおむね肯定できるというのが結論である。しかし、実際は、北の思想は最も重要な要件を欠いているというのが平林の本音であり、そこから平林の現代に対する要求を読みとることができる。

#### 「我国現代の哲学者」上、中、下(『新時代』大正7年12月、大正8年1月・2月)

「明治から大正へかけての日本に何等かの哲学があるとすれば、それは移植された西洋哲学があるのみである。」(上、78頁)平林は、日本の近代哲学の移植性を正しく指摘する。また、次のようにも述べている。

哲学思想の上から見ると日本は一等国はおろか到底独立国と称することは出来ぬ。先進諸国の勢力は日本がまだ西も東も弁別し得ぬ思想上の揺籃時代に既に日本を分割して了つてゐた。さうして漸く物心のついた頃には既に日本は動きのとれない属国の境遇に自己を見出したのである。(中、122頁)

このような状況にあつて、「西洋哲学の輸入」に功勞のあつた学界の重鎮井上哲次郎は、「国民道德のプロパガンダ」としてはいざしらず、「知識としての哲学」としては「現在といふ一刹那」において「生命を失つてゐる」。(上、78頁)「独創の境地を開拓」することこそ、今日の課題であろう。(上、81頁)

この点、西田幾多郎には「我国の学者に幾んど見ることの出来ぬシンカーの趣が多少ともある。」他人の学説を尊重しながらこれに捉われることなく、「自己の頭腦のみを頼りとして思索し得る人は博士(西田一引用者)を以て第一人者とする。」

僕は博士の哲学にそれ程尊い独創があることを認めておらぬ、(中略)けれども、博士の思索が割合に既成の哲学体系に煩はされてゐないこと、博士の心中にオーソドックスの影が比較的薄いことだけは認めて大いに多なりとせざるを得ない。換言せば西洋哲学の重囲に陥りつゝ僅に身動きだけでも為し得た人は見渡す所博士一人位であらう。(中、123頁)

しかし、平林は、ただむやみに独創を尊ぶわけではない。平林は、紀平正美が「西洋人の糟粕を斥け汝々として独自の境地を開拓せんと力めらるゝ誠意と勇氣」を評価しつつも、「理知の世界に於ては誠意は真理の保証とならぬ。」と断じる。

紀平は自らをヘーゲルになぞらえているが、ヘーゲルは「歴史的研究」を無視せず「論理の綿密」を忘れなかった。「哲学のシステムを完成するには、氏の頭脳は今一段論理的に整頓される必要がある。」「ヘーゲル哲学に大乘起信論を加へた合の子弁当の御馳走位では、吾人の食慾を刺激するにはあまりに貧弱ではないか。」(上, 80頁)

その意味で、むしろ、カント哲学に「随喜」する桑木厳翼の方が正しいところにいる。桑木は「論理の遊戯の価値」を説く。たしかに、哲学は「知識欲の産物」であり、論理以外のものを求めるのは間違いである。(上, 78~9頁) だから、「徒らに書齋より街頭へ出るのは哲学者の慎むべきことだ。」「一見人生と没交渉なるが如き処に真の第一義生活と哲学との交渉があるのだ。」(上, 81頁)

また、平林は、藤井健治郎の『主観道徳学要旨』<sup>(9)</sup>について、この書は「リップスの継承」であると否にかかわらず、「記述」が「明晰」で「理路」が「井然」としている。倫理学という、倫理学者自身でさえも、「修身の本」と混同するように、「倫理学の本といへば皆修身の教師が訓話をするやうな非学問的なものが多いが、博士(藤井一引用者)の著述は大分この悪影響を免れてゐる。」としている。(中, 125頁)

連載第三回の冒頭で、平林が次のように述べるのは、さきの「文明批評家としての北吟吉」に示されたのと同じ時代認識に発している。

近代哲学の中心問題が自然科学の批判である以上、哲学を専攻する学生に理論物理学や高等数学の初歩の知識位を教へぬといふは甚だ不都合である。(中略) 科学の概念なくして何の科学批判があらう。かゝる本末顛倒是吾国の如き不正則の文化を有する国には随所に見られるが、哲学不振の原因の一つは慥かにこゝにあるのだ。(下, 95頁)

科学を批判するとは、平林にとって、科学を拒否することではなく、より深く科学を理解することなのである。独創への待望が、西洋哲学の拒否とはならず、論理の尊重へと向かったと同じく、こうした思考の展開のうちに平林の発想の特徴を見てゐることができる。

さて、このような観点から、平林は、田辺元を推賞する。

博士(田辺一引用者)は哲学専攻の文学士にしてしかも理科に学んで此の方面の理解力も亦相当に有せらるゝを以て、我国の哲学者の仲間には推しも推されもせぬ独自の地位を占めてゐる。近著「最近の自然科学」及び「科学概論」の二部は少くも最近僕の読んだ邦文の哲学的著述中では最も印象の深いものであつた。(下, 95頁)

哲学と科学の両者を兼ねそなえているところに、田辺の「ユニークな立場」がある。ただ、田辺にはこの「新鋭の武器」を活用する上で「突進する勇氣」が欠けていないだろうか、と平林は激励している。(下, 96頁)

以上、独創性の強調、論理の尊重、自然科学の重視という三つの主張から導かれる平林の結論は、次のとおりである。

僕は屢々模倣をすてゝ独創を尚ぶべき旨を記したが、実際の所模倣でもよろしいからもつと――西洋の哲学思想を輸入し研究する必要を更に深く感ずる。(中略) 少くも有名な哲学上のクラシック位はどしどし――翻訳すべきが先進国に対して敬意を表する所以でもあり、後進国自らの利益でもあるのだ。徒らに他を排して自らよしとするは結局は自らの損を拓く基となる心すべきである。

最後に学問の価値を世間がもつと認識せねばならぬ。世界の文明国の中で日本人は読書せぬこと第一等であるさうだ。実際の役にたゝぬ学問はすぐに空理として軽蔑す



る傾向がある。これが学術の進歩に対する第一の障碍である。(中略)

芸術の方面では既にずっと以前に芸術の為の芸術 Art pour l'art<sup>アール・プールのラール</sup>の運動がおこつた。学術の方面でも近頃科学の為の科学 Science pour la science<sup>シヤンス・プールのラ・シヤンス</sup> 或は知識の為の知識 Savoir pour le savoir<sup>サヴォアール・プールのラ・サヴォアール</sup> といふ声<sup>サヴォアール</sup>が随處に起つてゐる。目先の応用ばかり考へてゐるは実験科学だつて進歩するものでない。況や哲学をや。(下、98頁)

独創よりも模倣を、そして、応用よりも知識のための知識をというこの結論は、のちにプロレタリア解放のための文学を提唱することになる平林には、あまりふさわしくないように見えるかもしれない。おそらく、それは、この結論が、平林の真に求めるところを示したのではなく、さしあたって現状においてはという、当面の策を示したにすぎない、というところに原因があると思われる。しかし、それにしても、さきの「文明批評家としての北吟吉」にも見られたように、「第一義生活」からただちに発想するのではなく、さしあたっての現在から出発するところに、平林の発想の特徴があったのであれば、この結論は、さらに高い次元での独創や応用を排除するものではないばかりか、むしろ、それに至るための不可欠の前提として考えられていたはずである。

### 「文芸批評界の三星」(『新時代』大正8年3月)

この論文は、平林が、哲学界から眼を転じて、当時の文芸評論界について論評したものであるが、さきの二つの論文にくらべて印象がうすい感がある。それというのも、ここでとり上げられた三人の文芸評論家が、平林の求める水準から、かなり低いところに位置しているからであろう。さしあたり現在は、というのが平林の議論の基調であつたにしても、ここでの平林は、かなり無理をしているように思われる。とりわけ、末尾で、「三氏以上に期待すべき未来をもつてゐる人々は少くないと思ふ。私は唯殆んど偶然に三氏を選んだのみである。」(76頁)と弁解しているのはその証左と考えられる。

平林は、「最近数年間に吾が国の文壇は三人の巨人を黄泉へ送つた。」と、上田敏、夏目漱石、島村抱月の三人の死をいたみ、その後継者として、松浦一、厨川白村、片上伸の三人を選び、その長所と短所とを論じている。しかし、その一々に立ちいらなくても、この三者に対する平林の評価は、次の部分に端的に示されている。

何故私がこれ等の三氏を逝ける三者の後継者として、新日本文壇の三星として選んだかといふことは私自身にもわからない。不慮にいへば此の三氏は揃ひも揃つてペダントである。(中略)けれど善い意味のペダントは決して排斥すべきでなく寧ろ歓迎すべきである。私はペダントの少いことを日本人の欠陥の一つに数へたいと思ふ位である。併しながらペダントとクリチックとは同一ではない。従つて前にあげた三者の天職にはそれと相違があり、しかも私の要求するクリチックの資格の全部はまだ此等の人々のいづれにも所有されてゐない。(72~3頁)

当時の文芸評論界の最良の部分を取りあげてみても、せいぜいペダントにすぎない、そうした思いが、平林をして自ら文芸評論の筆をとらせることになつたのではないか、と考へることもできる。

### Ⅲ 新しい文学を求めて——最初期の文芸時評

大正6年(1917)7月、早稲田大学英文科を卒業した平林は、アテネフランセに入りフ

ランス語を学ぶなどしていたが、7年5月、やまと新聞社に入社した。これ以後、大正9年1月、社の争議に関わって退社するまで、文芸欄を担当し次の文芸時評を執筆した<sup>(10)</sup>

「七月の文壇(一)~(五)」大正8年7月7日-14日

「八月の文壇(一)~(七)」同年8月7日-17日

「九月の文壇(一)~(八)」同年9月4日-17日

「十月の文壇(一)~(七)」同年10月3日-18日

「十一月の文壇(一)~(八)」同年11月1日-15日

「師走の文壇(一)~(五)」同年12月5日-14日

これらの時評文については、さきに挙げた紅野敏郎、渡辺正彦両氏の分析があるほか、伴悦氏「平林初之輔論 <懐疑>への試行」(『現代文学研究叢書』第1巻、芳賀書店、昭和41年)がこれに触れている。

紅野氏は、「文芸批評家平林の誕生の地点から、『無産階級の文化』の著者平林までの時間的距離は、わずか1.2年のあいだであり、そこが平林研究の最初の関所でもある」とし、これら最初期の文芸時評を、プロレタリア文学理論形成に最初の貢献をなした『無産階級の文化』に至る前段階と位置づけ、「後年の平林の文学観のした地は、それなりにくっきりと影を落している。」と論じている。(前掲論文、37~9頁)また伴氏も、「ひいては、<変態的資本主義の歴史>(明治の歴史)解明を企図する後年の『日本自由主義発達史』をも予測できる原点が、すでにこの「やまと新聞」時代にめばえていた」としながらも、その議論の基調は、「そのまま<無産階級の独裁>を核とする<無産階級の文学>へとつながった」というように、紅野氏と同じく、初期文芸時評をプロレタリア文学理論と結びつけるところにある。(前掲論文、134頁)

しかし、これらの初期文芸時評とプロレタリア文学論の間には、ロマン主義の提唱という時期が介在しているのであり、紅野氏のような分析によっては、それが無視されてしまう結果になる。

平林が『新潮』への寄稿を依頼された時、彼は、それまでの文芸時評の経験のなかから、自らが現代の文学にとって最も必要なものを熟慮し、その上で執筆したはずである。その結果として平林は「ロマンチック時代」を書きあげたのであった。とすれば、初期の文芸時評は、より直接的に、ロマン主義の提唱へと接続するものとして読まれるべきであろう。その点、渡辺正彦氏が、初期文芸時評を、「ロマンチック時代」との関連において論じているのは正しい。(前掲論文、50頁)

次に、これらの文芸時評全体にわたって、そこに示された平林の思想の特質について分析してみたい。

「七月の文壇」の冒頭で、平林は次のように述べている。

世紀末病の診断をやったマクス・ノルドーに現代の日本を診察させたら彼は何といふだらう、恐らく彼は日本の社会は人事不省の状態だといふかも知れない、もしかすると、日本は死んでゐると飛んでもない誤診をやるかも知れない。死んだ日本にデモクラシーの運動が起つたり小説がひよこ 〽 生えたりするのは何故だと反問したら彼は平気で「それは死体へ黴菌がついたのだ、悪性の舶来黴菌だから用心し給へ」など、気の弱い患者に脳貧血をおこさせるやうな返事をするかも知れない。(『平林初之輔文芸評論全集』——以下『全集』——下巻、407、文泉堂書店、昭和50年)

紅野敏郎氏も指摘するように（前掲論文、40頁）時評文の冒頭にこのような一節を書きつけるということは、平林が並の文学青年ではないことを示している。それにしても、この一節は、平林のどのような時代認識を示しているのか。

日本文化の移植性を揶揄していることは間違いないが、「もつと翻訳を盛にせんと日本の小説もよくなる見込がない」（『全集』下巻、416頁）という平林が、移植文化そのものを否定するはずはない。第Ⅱ章で考察したように、平林の発想には、日本文化の自立を願いつつ、そのための前提として、西洋文化の十分な理解を要求するという論理がある。つまり、ここで平林は、一見堂々としている日本の近代文化の奥深いところに、極めて脆弱な部分があることを指摘しているのである。

それは、おそらく、『三四郎』（明治41年）の冒頭の部分で、漱石が、三四郎の「然し是からは日本も段々発展するでせう」という言葉に対して、「亡びるね」と広田先生に答えさせた時に、考えていたことに近いであろう。（『漱石全集』第4巻、21～2頁、岩波書店）

ところで、平林がここで、「デモクラシーの運動」と「文学」とを並べて論じていることは、彼が、文学と社会の動きとを関連させて捉えていることを示している。それは、平林が、「十一月の文壇」の冒頭で、次のように論じていることからわかる。

社会が恐ろしい力で進んでゆく。デモクラシーだの普通選挙だのといふ生温い言葉は置去りにして産業自治だのギルドソシアリズムだのといふ思想が刻一刻と實際生活の分野に侵入して来る。所がこゝに取り残された一郭がある。文学者のグループがそれだ。そこは社会の大きな波浪から絶縁された世界だ。（『全集』下巻、433頁）

平林の眼には、急激に展開しつつある時代の流れが、はっきりと映っている。動くものこそが時代なのだ。このような中であって、文学だけが旧態依然としたままでいることができるだろうか。これに続けて、平林は次のように述べる。「外洋の怒濤は愈々荒れ狂ふ。この孤島の平和も長くは続くまい。間もなく大波がまき起つて一切の古いものを洗つてしまふだらう。そこに新しい世界が出来る。このニュー・ジュネレーションによつて新しい文学が生れるのだ。」（同頁）

文壇というせまい天地を脱して、激しく動く現代と真正面から対決するところにこそ、新しい文学の可能性はひらける。この点では、当時すでに胎動しはじめていた労働者文学も決して十分ではない、と平林は考える。『我等』に載った田中純の感想文に対して、次のように言う。

近頃文学者が社会問題に筆を取り出したのはいゝ傾向だが、どれを読んでも誠意のないのに失望させられる。一体彼等は既成の学問の体系を悪い意味で無視してゐる上に、民衆の外に立つて勝手な議論をしてゐる。彼等の落ちつく所は結局個人主義だ。ここが理論上最も無難で、しかも天才らしくて、深みがありさうで、おまけに官憲の治外法権の安全地帯と心得てゐるのだらう。（同、413頁）

また、宮地嘉六の「音戸の瀬戸」を、「近来の傑作」と評価しながら、「此の作者の世界があまり狭いのが僕には最も不満足だ」ともらしている。（同、420頁）

平林にとって、時代と関わるということは、科学を批判することが科学を深く理解することであつたように、単に意匠として時代を描くということではなく、深くその時代を理解した上で、根源的にその時代を越えるということに他ならなかつた。表現された内容が新しくても、表現する方法が古ければ、少しも新しいとはいえない。

新しい時代は、新しい感受性を、そして新しい表現形式を求めているのだ。平林は、室生犀星の「一冊のバイブル」を、「嫌味のないごく清新な作だ」としながら、そこに内包される従来の「詩」という観念に対して異議を申し立てている。

日本の詩人は奈良朝以来月だの花だの虫だのにはばかり感嘆してゐたのでこの国民的伝統が遺憾なく大正の室生氏にも無意識にあらはれて広小路の夜店の虫に感傷させる。白耳義の先年死んだエルハーレンが工場や停車場などの物凄い生活を謳つたのと比較するとどんな気がするだらう。人は、このやうな作が佐藤春夫氏の所謂詩があつていゝのだらうか。僕は詩などより血がほしい、血と肉と生命と苦悶と戦ひとが。(同、421～2頁)

また、吉田絃二郎の「熊のわな」を、「よくかけてゐる」としながら、次のように批判している。

併しこんな風に自然を大きくかいて人間の力を無限小にしてしまふのは考へものだ。もう少しはつきりした人間のアクチヴィティーが無いと読者を徒らに詠歎の世界へつれこむだけで現実的イリュージョンを起させない。(同、431頁)

平林は、「自然」のリズムのうちに人間を包みこんでしまう伝統的な手法によっては、もはや、時代が強いる新しい「詩」、「工場や停車場」を表現することができないと考えている。そして、このような、表現すべき内容と手法の落差が、作家たちを圧迫しているのを見ぬいている。

平林は、田山花袋の弟子水野仙子の作品を、「死んだからほめるといふやうな殊勝な心懸」からではないが、とことわりながら、高く評価し、しかし最後に、「それにつけても此のやうな未来のある人を死ぬるまで似而非自然主義の柵内に閉ちこめておいたものは誰の罪だらう。」と一言している。(同、411～2頁)

小川静枝の「弱い心」を評して、「所々に実にヴィヴィッドな描写がある」としながら、「全体のストラクチュア」が欠けている。「それに日本文壇の最近の伝統に因はれて積極的元気がまるでない。」と指摘している。(同、427頁)

また、三津木貞子の「泥酔」について、「三津木は実に器用になつた。年のせいと見えて女学生じみた星董文学からだんだんリアリズムに進んで来る傾向が見える」としながら、しかし、それがかえって「危険」なので、「リアリズムの泥海へひきずり込まれる」おそれがある。(同、446頁)

ここで平林が、「似而非自然主義」といい、「日本文壇の最近の伝統」といい、「リアリズムの泥海」といっているのは、すべて一つのことを指している。明治末以来文壇を支配していた自然主義のことである<sup>(11)</sup>。彼がそれを「似而非」と呼ぶのは、おそらく、フランスの自然主義と比較して、日本のそれを本物の自然主義とは見ていないことを示している。この段階では、文壇に対する平林の態度は必ずしも明確にはなっていないが、自然主義批判という点だけは鮮明である。「材木の儘ならリアリズムで夫を組立てゝ家にすると概念小説だといふ所などは古今独歩前代未聞の断定だ。」(同、446頁)という言葉が示すように、平林は、作者自身の主体によってしっかりと支えられた統一ある作品を求めたのであり、それとは逆に、単なる外界の描写によりかかった作品を、「似而非自然主義」と呼び「リアリズムの泥海」と呼んだのであった。

しかし、だからといって、平林は、作者自身の社会に対する見方が作品にそのままスト

レートに反映しなければならない、と考えていたわけではない。宮地嘉六の「ある職工の手記」について、「社会的背景は少しもなく所謂労働問題にも触れてゐない。」と指摘した後、平林は次のように述べている。

勿論無理にでつち上げた傾向小説には記者も賛成出来ないが、ある個人のライフを描けば必然そこに社会が浮び出てこねばならぬ筈だ、小説は概念ぢやない。社会から個人の生活だけを抽象することは許されないことだ。そんなことをするのは作者がほんとの生活を見てゐないことの証拠になるのだ。(同、422頁)

ここでは、宮地の作品に社会的背景が欠落していることの指摘であり、社会から個人だけを引き離すことが批難されているが、同様に、個人から社会だけを引き離すこと、「個人のライフ」とは別に社会を概念として提示することも批判されなければならない。つまり、社会へと開かれた視点はもちろん不可欠であるが、それは概念としてではなく「個人のライフ」として表現されなければならないのである。それは、小川未明に対する評価においてははっきりと示される。

小川の「浮浪人の手紙」と「感激」をとりあげて、平林は、「社会問題小説に一步を進んで来た」と評価しつつも、「双方とも概念的輪郭的平面的叙述に流れて生々しい実生活の内容が少しも描かれてゐない。」と批判している。(同、431頁)

さらに、小川の「何を考へるか」を論じて、「相当の熱と感激とを湛へた作だが、おいしいことには統一がない、如何にも散漫だ。」「それに談義が多過ぎる。それがほんとに客観化されてゐないのでびつたりと迫つて来ない。」「労働問題と氏の体験の世界とがまだ別々になつてゐる。概念的には社会の欠陥がわかつてゐても、それを実感して、表現する道程でつまづいてゐるやうな気がする。」とその欠陥を指摘している。(同、435頁)

社会に対する正しい認識が、ただちにすぐれた作品を生み出すというような、楽天的な考えは平林にはなかった。小説における「表現」の役割に十分自覚的であった。彼が、宇野浩二を高く評価するのは、そのような立場からである。

平林は、宇野の「耕右衛門の改名」をとりあげ、「今年出た小説では五指の中を外れつこのないものだ」と述べ、さらにその理由を次のように説明している。

氏の描写には幾何の問題を解いてゆくやうな明快がある。それは論理的であるからでなくて具体的であるからだ、不確かな感情の挾雑物がなくて純粹な而かも輪郭の太い感覚で一貫してゐるからだ。(同、428頁)

同じ月、宇野の「転々」をとりあげ、その主人公が「作者の狭い主観中の人間で従つて此の作は所謂芸術家の為の芸術に墜してゐるとも見られ」るかもしれないが、「主人公が小説家であるから悪いといふ道理はない、医者でも商人でも乞食でもそこに人間性が描かれておればどんな特殊の生活にでも普遍的意味が生じて来る」と弁護し、「彫刻のやうにはつきりと小気味よくぐんぐんと彫りつけてゆくやうな表現は相変らず天下一品」と評価している。(同、429頁)

しかし、平林が宇野浩二を評価するのは、彼の求める新しい文学の立場からではなく、さしあたって現在はこのやうな相対的なものであった。平林の求める文学は、まだ現実には存在していないのである。

お わ り に

大正7年(1918)から8年にかけての、最初期に属する平林の思想は、とりわけ彼が大正10年に至ってプロレタリア文学論を提起することから、それとの関係で考えられることが多い。しかし、これまで考察したところでは、直接的な関連はほとんど見られない。

平林の時代を見る視角は、移植—独創、あるいは、科学主義—理想主義という座標が中心的であり、ブルジョア—プロレタリアという軸はほとんど見られない。「ブルジョアジー」という言葉は使われているが、それほど深い意味はこめられていない。

社会と文学との結びつきは主張されているが、平林にあっては、両者はあくまでも「表現」を媒介として結合されるのであり、直接的な関係は否定される。彼は、過渡的な措置であるにしても、「芸術の為の芸術」を待望したりする。

なんらかの形で、プロレタリア文学論との関連が考えられるとすれば、平林が、文学における「反抗」を重視していることであろう。たとえば、「新しき社会の為め新しき文芸雑誌」と銘うった『黒煙』について、平林は、「私はかういふグループからもう少し深刻な戦慄を社会に与えてほしい。」と熱望し(『全集』下巻、424頁)、また、沖野岩三郎の「有りの儘」について、「事実の羅列」で「心理の描写」がなく、これでは「日記か予審調書」とかわらないとしながらも、「比の人に一つ尊いものがあるのは反抗の精神だ。」としている。(同、436頁)

しかし、この反抗も、文壇の閉塞状況を打破するためのショック療法として求められたものであった。従って、それは、プロレタリア文学論よりも、自然主義の否定としての、ロマン主義の提唱へとつながっていく方向性をもつものであったといえよう。

さて、本稿で考察した初期の作品群と「ロマンチック時代」(大正9年3月)とを結ぶものとして、大正9年4月『新時代』に発表された「三月の文壇の事」という時評文を、かんとんに見ておきたい。

冒頭、平林は、菊地寛の「ある批評の立場」をとりあげ、「印象批評と客観批評の区別」について次のように述べている。

真の印象批評が菊地氏の言ふように女性的な受動的なものであるべき筈であらうか？ 純粋な受動から批評が成立するだらうか？ (中略) 印象といふ心作用に主観のアクチヴが全然参与しないと云ふ観方は、近世の心理学を無視したものである。(中略)

僕は一切の心的活動と同じく芸術批評の主観的であることを信ずると同時に芸術作品の価値判断の可能なることをも信ずる。それは芸術のゾルレンによつてある。芸術作品に対すると常にこのゾルレンの命令を感ずる。それは主観を超越したものだ。

(中略) 主観の中に主観を超越した一般者即ち価値を眼中に置かない批評はどうあつても信じられない。(『全集』下巻、448~9頁)

平林は、芸術に対してはハカリやモノサシはありえないから印象批評でいくしかないという主張に対し、二つの点から批判を加える。第一に、人間の主観を、単に外界を受容する鏡のようなものとする見方を批判する。平林の考え方の底には、世界を構成するものは主観の働きであるという近代認識論が息づいている。作品を支えているのは、外界(自然)のリズムではなく、人間のリズムであるという確信が横たわっている<sup>(12)</sup>。

第二に、平林は、主観が恣意的なもので、客観的な基準がないという主張を批判する。

「ゾルレン」という言葉使いには新カント派の影響がほの見えているが、さらにそれを「一般者」と言いかえるところには、西田幾多郎の影響を見てとることができよう。いずれにしても、平林は、主観のうちに、ある規範的な働きが内在していて、それが批評に客観的な根拠を与える、と考えていた。

ここには、さらに、「文学批評は飽く迄主観的である、けれど主観の中に主観を超越した何物かなくては批評が成立しないことも確かだ。」(「八月の文壇」「全集」下巻、414頁)とほのめかされていた平林の批評の原理が、かなり明確な形で展開されている。その立場は、主観と客観を峻別し主観の構成によって客観が成立するというカントの近代認識論をふまえているばかりでなく、主観と客観の具体的な関わりをも射程に入れている<sup>(13)</sup>。

つづいて平林は、「表現に苦心」したり「意味のクリーヤな文章を書く人」たとえば菊地寛や芥川竜之介を、「技巧派」と一括して嘲笑する傾向を批判して次のように述べている。

僕は今の日本の文壇の欠点といふべき物は表現の技巧の欠如と、主観の透入(批評でも感激でもいゝ)の稀薄とだと答へる。大抵の小説はいはゞ形式的にも内容的にもエンスージアスムを失つた虚無に墜落しかゝつてゐるやうに思ふ。調子が低ければ低い程、表現が晦渋であればある程現実的で、自然だと思ふのは迷ひである。(『全集』下巻、449頁～50頁)

平林は、テーマ小説と技巧派を積極的に肯定することによって、自然主義の無思想と無技巧を批判する。「自然は最も偉大なる技巧である。汲めども尽きぬテーマをもつてゐる。」(同頁)と平林はつづけている。

ついで平林は、室生犀星の作品をとりあげ、ふつうの作家たちが「一種の狭い世界観」にとじこもり「素直にも物を見る眼を失つてゐる」のに対し、「氏の観察は稀らしく自由で一脈の新鮮味をもつてゐる。」と評価する。しかるに、こうした立派な素質の持ち主がどうして「力のある作品」を出さないのかと問い、それは「作者の主観の燃焼力が弱いからである。内的統一が足らぬからである。」と答えている。(同、450頁～1頁)

また、水守亀之助の作品について、なんの技巧も「オリジナルな表現法」もそこにはないが、「質実に、まじめに深くさぐることによつて虚偽と浮薄と妥協とを浄化してゆくことが出来るならこれが文学革命の最も有効な方法であらう。」と論じている。(同、454頁)ここではじめて「文学革命」という言葉が登場する<sup>(14)</sup>。平林は、主観の燃焼を支える技巧を要求しつつ、他方で、社会と真正面から対決していく姿勢を高く評価している。おそらく、平林は、真に力のある作品は、社会との深い関わりと、それを表現する技巧との結合によつて生まれると考えていたのであろう。

最後に、平林は、片上伸が、「文学が時勢に取り残されたといふ考へ方」を批判し「それは時勢を買ひ被つたものである」と述べたことについて、「不徹底な普通選挙の空騒ぎや、労働運動の喇叭吹きばかりで時勢を評価する」ならたしかに片上のいう通りだが、「時勢は黙つて流れてゐる。その沈黙が或る日音をたて、来たら浮つづらな政治論や社会論も屏息するだらうが、文学がどんな態度をとるかも見ものである。」と批判している。(同、455頁)片上の論文は直接平林に向けられたものではなかったが、五ヶ月前に「社会が恐ろしい方で進んでゆく。」「所がこゝに取り残された一郭がある。文学者のグループがそれだ。」(同、433頁)と書いている平林である。一言なければならなかった所以である。作家の側がどのような態度をとろうとも、社会の動きは、早晚文学の領域に何らかの変化をこうむらせず

にはおかない、というのが平林の固い確信であった。

(昭和56年9月1日受理)

註

- (1) この概念については、拙稿「田辺元における弁証法の展開(Ⅰ)」(『愛知教育大学研究報告』第28輯(人文、社会科学)107頁、昭和54年3月)参照。
  - (2) 饗庭孝男は、「研究室の教授の部屋」では「隣の部屋の話し声など絶対に聞えなかった」という矢内原勝の言葉を引用している。(『大正教養主義批判』『現代文学』2号、昭和49年。『近代の解体——知識人の文学』104頁、昭和51年河出書房新社)
  - (3) たとえば、鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』(筑摩書房、昭和44年)
  - (4) このような視点から書かれた思想史研究はきわめて少い。その中で、神島二郎の「近代日本における中間層の形成過程——欲望ナチュラリズムの問題をめぐる」(『思想』昭和33年)は「自然村秩序」の解体ともなって、明治を支えた「献身の道徳」から「欲望ナチュラリズム」への「暗転」があったことを膨大な文献を駆使して実証している。
  - (5) 『平林初之輔文芸評論全集』中巻(文泉堂書店、昭和50年)223～38頁
  - (6) 住谷一彦は、日本社会のメカニズムをとにかく総体として把握するという視座を打ち立てたのは日本ではマルクス主義が最初であったという丸山真男の指摘を一応肯定しながらも、日本のマルクス主義のはらむ固有な問題は必ずしもマルクス主義そのものによっては相対化されなかったと指摘している。(『「スミスとリスト」から「マルクスとヴェーバー」へ——特殊・日本「市民社会」思想研究への分析視角によせて』『思想』昭和43年10月、115～6頁)
  - (7) 拙稿「初期田辺哲学の形成——大正思想史のこころみ」『愛知教育大学研究報告』第27輯(人文・社会科学)昭和53年、146～8頁参照。
  - (8) 田辺元については、前掲拙稿「初期田辺哲学の形成」139頁参照。
  - (9) この著作については、拙著『明治思想史』(ペリかん社、昭和43年)第IV部第4章「藤井健治郎と自我普遍化の課題」参照。
  - (10) 平野謙によれば、これらの時評文が中村武羅夫の眼にとまったことが、平林が『新潮』に登場するキッカケであったという。(『文芸時評といふもの』『文芸』昭和38年8月、165頁)
  - (11) 自然主義は、大正に入って影響力を失ったと言われているが、和田謹吾は、それは「評論の動向に比重をかけ過ぎたことから生じた評価であり、大正期こそは自然主義が作品において成熟した時代であったとしている。(『大正期の自然主義』『文学』昭和39年11月)
  - (12) 平林が自然主義を批判するのも、それが外界の描写(リアリズム)のうちに主観の能動性を放棄してしまうと考えられたからである。自然主義が近代認識論を十分理解していないことについては安倍能成の批判がある。前掲拙著『明治思想史』第I部第3節参照。
  - (13) 明治末期、たとえば桑木厳翼にとって、問題は、個人に属する主観(意識)がいかんして普遍妥当性を獲得できるかであった。(拙著『明治思想史』第IV部第3章参照)しかし、大正においては、単なる論理の普遍妥当性は現実の客観性を保障するものとはならず、たとえば田辺元や、三木清にとって、問題は、いかんして論理の普遍妥当性は現実のうちに実現されるかという、両者の相互関係へと移っている。拙稿「田辺元における弁証法の展開(Ⅱ)」(『愛知教育大学研究報告』第29輯(人文科学)昭和55年3月)註10参照。
  - (14) 渡辺正彦「平林初之輔試論」(前掲)は、この「文学革命」をキーワードとして平林の全体像を捉えようとしたものである。
- [付記] 引用文中、新字体のある漢字はそれに改め、傍点の類は省いた。